

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01259

研究課題名(和文) 手話言語における空間と語順のインターアクション：言語学的特徴とその発達

研究課題名(英文) Linguistic and developmental studies of the interaction of space and word order in sign languages

研究代表者

松岡 和美 (MATSUOKA, Kazumi)

慶應義塾大学・経済学部(日吉)・教授

研究者番号：30327671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、手話言語の継時性と同時性の相互作用の特性を明らかにするとともに、ろう研究者の育成を意識した研究活動を展開することであった。ろう者・聴者のメンバーが、4つのサブテーマに「分析」「発達・学習」の二つの視点からアプローチする形で、主に日本手話のデータ収集と考察を行った。日本語と英語で論文・論文集・専門書・一般書を刊行し、国内外で不足している日本手話に関する研究成果の共有を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統語理論や言語発達研究で蓄積された先行研究の内容を踏まえた日本手話の研究は、他国の言語研究者も参照できる質のものであり「音声の特性に影響されない人間言語の抽象的特性のより深い理解につながるため学術的に大きな意義を持つ。地域共有手話とL2習得の研究では特にろう当事者が主導・もしくは共著者として関わりながら進められ、ろう当事者が自律的に研究を行い、学術的なキャリアを積む機会として一定の成果をあげた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the current study was to clarify the characteristics of the interaction between sequentiality and simultaneity in sign languages, and to increase research activities with an awareness of the development of deaf researchers. Deaf and hearing members mostly collected and analyzed the data of Japanese Sign Language (JSL), approaching the four subthemes from the two perspectives of “analysis” and “language development/learning”. Our findings were published in various forms of academic and non-academic publications, in both Japanese and English, which is expected to contribute to sharing facts about JSL, domestically or internationally.

研究分野：言語学

キーワード：日本手話 マウスアクション 認識モダリティ RS 手のリスト 複合語 プロソディ 手話の進化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

手話言語学は欧米諸国で活発に研究されており、音韻・形態・統語・意味・社会言語的考察のすべての分野において、重要な研究成果がもたらされている (Pfau et al. 2012)。音声言語のデータから構築された理論的枠組み (生成文法・認知言語学など) を用いて手話言語を考察する研究も盛んである。その結果、人間言語の根源的な性質に関心を持つ言語研究者の間では「言語の本質に音声は不可欠ではない」という見解が広まり、手話言語の抽象的特性の情報に対するニーズは高まる一方である。その一例として、欧米で長い歴史を持つ理論言語学の関連学会 (GLOW, WAFL など) でここ数年、手話言語を対象を限定したワークショップが同時開催されていることがあげられる。早期に確立した手話音韻論に続いて、手話統語論・手話意味論の研究も各国で活発になっているが、日本ではすべての分野において、言語研究に利用できる手話言語の良質な記述が大幅に不足した状況が続いている。

日本手話は、ろうの両親のもとに生まれたろう者 (ネイティブサイナー) が母語とする自然言語である。しかし「手話の研究」と銘打ってはいても、手話単語を日本語の文法にしたがって用いる手指日本語 (日本語対应手話・手話アシスト日本語) と日本手話を区別せずに記述した資料や、データの適格性をネイティブサイナーに確認せず公開されている資料は少なくない (日本学術会議 2017年8月22日付提言「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」)。日本手話の認知が不十分である現状では、ろう者と聴者が地域で共有する手話 (地域共有手話、日本手話の方言とは異なる) の記述・保存も十分には行われていない。この状況を改善するためには、言語研究の手法に通じ、データ収集と分析で主体的な役割を果たせるよう研究者を養成する必要がある。

特に、日本を含めたアジア各国の手話研究の態勢はいまだ未整備の部分が多い。その要因の一つとして、手話言語を母語とするネイティブサイナーへの教育環境、特に学術的な場における情報保障 (手話通訳や要約筆記) の不備があげられる。たとえば日本の場合、日本手話の言語学的な研究が遅れていることから、日本手話が日本語と本質的に異なる言語であるとの認識が社会に広まらず、手話言語を用いるろう教育の重要性が保護者・医療関係者・教育関係者に周知されていない状況が生じている。この状況を打開するためには、より質の高い、科学的データに基づく手話研究の振興が必要である。

2. 研究の目的

本研究が対象とするのは、語順をはじめとする継時性 (線的な順序にしたがう) と、手指・顔・頭などの複数の身体部位で表現される同時性の相互作用である。研究課題の確信を成す学術的「問い」は、「音韻・文法・意味にみられる手話言語の抽象的な文法的特性は何か (分析)」「上記の抽象的な言語特性は、どのようなプロセスを経て、手話を第一言語とするろう児、および手話を第二言語として学習する聴者によってどのようなプロセスで学習されるのか (発達・学習)」であった。

また、ろう者・若手研究者 (学位取得4年以内) が自律的に研究活動を行い、様々な手話言語を射程とする研究や、手話と音声を超越した、人間言語の特性を考察する機会をもたらすことも本研究の重要な目的と位置付けられた。

3. 研究の方法

上に述べた2つの「問い」に答えるべく、まず「手型と空間」「体のシフト (RS) と目線」「モダリティ・否定・アスペクト」のサブテーマを設定し、それぞれのテーマについて「言語記述」「発達・学習」の視点からデータ収集と分析を行う体制を整えて研究を開始した。

統語研究班は、文脈・状況をコントロールして自然な手話表現を聞き取るエリシテーションを含むインタビューを主に用いてデータ収集を実施した。具体的な研究トピックは以下の通りである。一文の中で、主文とは異なる出来事・事態が目線の変化によって標示される、いわゆる RS に着目し、その領域にみられる文法的制約の考察を行った (分担・内堀)。ろう者が数を扱う際に非利き手の指先を利き手で触る二種類の「手のリスト」質的な差異を考察し、両手を使う手話表現の考察を通して複合語・結果構文の考察へと発展させた (分担・浅田)。文中の情報に対する話者の心的態度を示す表現である (日本語「かもしれない」「ちがいない」等) の認識モダリティ表現と否定表現の語順の制約について、データを追加し、さらなる考察を行った (松岡、協力者・矢野、協力者・前川)。手話言語と音声言語に見られる「省略」現象の比較を多国の手話を対象とした先行研究に基づく比較を行った (分担・坂本)。

発達・学習チームは、日本手話を第一言語とするろう児 (L1) の自由発話を録画し、ELANにて注釈付与作業を行った (協力者・矢野)。日本語を母語とする聴の日本手話学習者 (L2) と日本

手話の母語話者の表出を比較するため、同一の映像の内容を説明するエリシテーションタスクを用いてデータを収集し、記述・分析を行った（分担・下谷）。またジェスチャーから手話への「進化」もまた広い意味での「（言語の）発達」ととらえ、愛媛県大島でのフィールド調査で得られた動画資料の注釈付与作業と分析を行い、地域共有手話の特性を考察した（協力者・矢野）。

なお個人情報が含まれる質問紙や個人が特定できる動画の収録にあたっては、データ提供者の意向を最大限に考慮した。研究への参加は任意とし、承諾後の撤回や撮影の中止や中断も、データ提供者の希望があれば可能とする。以上の点を協力依頼の時点において、書面および日本手話の説明で明確に伝えてデータ収集を実施した。

4. 研究成果

(1) 日本手話の特性に関する研究成果

【口の動き】本研究のキーワードである「同時性」を実現する表現である非手指表現、特に口の動きについての分析を進めた。音声言語と同じ口の動きと定義される「マウジング」にも、音声言語には見られない言語的な性質が反映されることがあり、手話言語独自の口の動き「マウスジェスチャー」と共通性があることを示す分析結果を、6月にオンライン開催された国際学会の招待講演で発表した（代表・松岡）。ろう者が主体となって「口の動き」をテーマとする輪読会を定期的に開催し（代表・松岡、協力者・矢野）、そこでなされた意見交換を端緒とする日本手話ろう者のマウジングの研究を海外大学のろう大学院生と共同で行い、2023年の国際学会で共著者として発表した（協力者・矢野）。

【認識モダリティと否定】日本手話の認識モダリティ動詞と否定表現の語順には一定の制約があり、その性質をカートグラフィの枠組みを用いて記述したものを、共著論文として刊行した（代表・松岡、協力者・矢野、協力者・前川）。日本手話の特定の文脈で頻出する名詞重複構文の統語・意味的性質について、国際学会で共著者としてポスター発表を行った（代表・松岡）。

【体の動き（RS）と目線】手話言語のRS（Referential Shift）とは、話者が「現在の自分」以外の人物の考えや行動を引用して伝える表現である。先行文献の2種類のRS（行動RS、引用RS）の基礎データを収集し、いずれにおいても話者の「目線」の変化がRSの起点と終点を標示することを確認した。さらに、引用RS・行動RSにおける文末指さしに注目し、その生起環境を調査した。特に、文末指さしは述語の後に現れるが、モダリティ表現や否定辞などを含む例で、従来はそれらが行動RSに含まれない例が報告されてきたが、含まれる場合について新たに詳しく検討した。また、主語を示す文末指さしとRSが標示される述語範囲との相互関係に着目し、文末指さしが主語を示さない場合について、RSの標示範囲との関係から整理した（分担・内堀）。

【削除現象の研究】音声言語・手話言語の削除現象の分析における論点を整理し、最新の理論的枠組みで手話の現象を扱う際に可能なアプローチを考察した。英語及び日本語の照応形と呼ばれる現象に焦点を当て、当該現象が省略によって生じるものと代用形によって生じるものを考察し、手話研究を射程に含めるために必要となる基礎データの考察を行い、国内外の先行研究と論点を整理した論考を手話言語学の専門書の一部として発表した（分担・坂本）。

【空間を用いた特性】日本手話における数の表現の非利き手の保持（WWH）に見られる制約は、それらの数表現が焦点（focus）であるという仮説ですべて捉えることが可能である。この制約は聴者のジェスチャーにはみられない。数の表現表出に使用される非利き手の特性の解明に続き、日本手話の複合語・結果構文の音韻特性を説明する統辞分析を提案し、手話言語の空間を用いた特性を示す知見を蓄積した。2021年以降は、日本手話の複合語・結果構文の音韻特性を説明する統辞分析を提案し、手話言語一般の言語理論に寄与した（分担・浅田）。

(2) 手話の発達に関する成果（L1, L2, 手話の進化）

【L2学習者の韻律形成要素】日本手話を母語とするろう者の語りから、Intonational Phrase（IP）に注目したプロソディ要素の分析を行った。うなずき・まばたき・手指の保持などが観察され、場面転換やロールシフトの開始と終了と連動している可能性を考察した。さらに成人日本手話学習者の音韻習得過程およびパターンを調査した結果、音韻パラメータのうち特に動きのエラーが最も多く、それが日本手話の韻律形成に大きく影響を与えていることがわかった。同じ動画を用いたエリシテーションで得られた表出データを使用し、手話学習者と母語話者のうなずきの比較についての専門書の執筆を共同担当した。日本手話母語話者と手話学習者の語りの中で句末に現れる手指表現及び非手指表現の関係性を比較し、エラー分析から得られた結果を英語論文にまとめて発表した。本研究課題を通して、成人日本手話学習者の手話の表出データを収集し分析を行った結果、手話の音韻パラメータの「動き」が日本手話の韻律形成に大きく影響を与えることを示した（分担・下谷）。

【ろう児の発達】日本手話を第一言語とするろう児の対話場面を録画し、ELANにて注釈作業を開始した（協力者・矢野）。日本手話版の言語発達チェックリストの内容をあらためて確認し、2023年度中にろう学校幼稚部の教員有志で試行的に使用を行うことになった（代表・松岡、協力者・矢野、協力者・池田、協力者・岡）。

【地域共有手話の空間的特性】宮窪手話の映像データの分析から一致動詞が日本手話の同種

の動詞とは異なる性質を持つことを示し、ジェスチャー（身振り）がホームサインを経て、ろうコミュニティの手話と地域共有手話に分かれて発展した過程を明らかにするとともに、ジェスチャーがホームサインを経て、地域共有手話もしくはろうコミュニティの手話に進化するプロセスについて、専門書に寄稿した（協力者・矢野）。地域共有手話の研究成果を踏まえて、アジア地域においての手話言語学の社会的認知と理解を進めることを目的とするアジア諸国の5つの大学と連携したウェビナー講演を2019年7月に行った（協力者・矢野、代表・松岡）。

(3) 国内外の情報発信

言語研究者への情報発信：東アジアの手話言語学の研究動向が概観できる論文集（洋書）を筆頭編著者として作成し、2022年12月～1月にかけて電子版と書籍版が相次いで発売された（代表・松岡）。この論文集には本研究課題メンバー（代表・松岡、協力者・矢野、分担・下谷）による共著論文が2本収録された。東アジア圏の手話研究の英語で書かれた情報は極端に不足しており、本書は近年のアジアの手話研究の成果が参照できる貴重な文献として利用されている。さらにL2班の分担研究者と研究協力者は、他の著者2名と日本手話の学習者のエラー分析の成果を踏まえた大学入門レベルの手話教材（和書）を2冊作成した（分担・下谷）。2022年度には、本研究プロジェクトの成果を踏まえた専門書（和書）を刊行し、メンバー全員が以下の章を執筆した。イントロダクション（代表・松岡）、プロソディ（分担・下谷）、複合語（分担・浅田）、文末指さし（分担・内堀）、省略（分担・坂本）、手話の発生（協力者・矢野）。この専門書は各トピックに関わる研究動向の紹介に続けて、著者自身の研究成果が短くまとめられており、最新の手話研究の動向がつかみやすい構成となっている。この書籍の一部を取り上げる形で、当事者・若手著者の研究内容の情報発信と意見交換を目的としたワークショップを2023年6月開催の日本言語学会第164回大会にて実施し、聴衆との活発な意見交換が行われた。

社会への情報発信：2021年に手話言語学・手話とろうアイデンティティの発達に関する研究成果を一般読者にわかりやすく伝えることを目的とした一般書（単著）を刊行した。この書籍の原稿チェックおよび手話例文の写真撮影にあたっては、研究協力者の矢野をはじめとして、多くのろう当事者のご尽力をいただいた。また、2023年には日本手話によるろう教育の重要性を取り上げた一般書では、手話言語に見られる「同時性」と日本語を含む音声言語に顕著である「継続性」の違いを平易に解説し、視覚言語の特徴が理解しやすい解説を執筆した（代表・松岡）。

(4) 本研究がもたらした成果・社会的意義・今後の展望

本研究では、学術的に意義深い研究活動が行われたのみならず、ろう研究者の育成・ろうコミュニティにおける手話研究への関心の喚起についても、一定の成果をあげることができた。ろう者の研究協力者・矢野は、本研究課題に関連した業績で2019年に日本言語学会の発表賞、また2022年に大阪で開催された、手話研究分野の重要な国際学会 TISLR において Student Award を受賞している。矢野は2020年に修士号を取得し、博士課程に進学した。研究期間全体を通して、矢野の他にもろう者が共著者となった学会発表や論文執筆が複数行われ、それらの研究成果の内容を一部反映した一般向けイベントも開催した。コロナ禍で出張の機会が限られていたが、期間の後半では海外の学会への対面での出席や研究機関の訪問を再開することができ、アメリカ・オランダなど欧米の手話研究拠点・ろう聴の手話研究者とのネットワーク構築も良好である。統語研究・言語発達研究において本研究課題で得られた知見は前掲の刊行物にまとめられており、各々のメンバーや、手話言語学に関心を持つ国内外の読者のさらなる研究の発展に寄与することが期待される。今後も、ろう当事者と聴研究者の連携・協働に注目した研究活動を展開することの重要性を示していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Asada, Yuko	4. 巻 8
2. 論文標題 Attributive compounds in sign language	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Phonological Externalization	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Asada, Yuko	4. 巻 5
2. 論文標題 Shallow resultatives in sign language	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of Formal and Experimental Advances in Sign Language Theory	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31009/FEAST.i5.01	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sakamoto, Yuta	4. 巻 55 (2)
2. 論文標題 NEG-raising via proform	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Linguistic Inquiry	6. 最初と最後の頁 436-444
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1162/ling_a_00474	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下谷奈津子	4. 巻 32(2)
2. 論文標題 M2L2の手話学習者における発話リズム 動きと韻律に注目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 手話学研究	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下谷奈津子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本手話学習者 (M2L2) の音韻習得過程における表出エラーのパターンとその要因	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 手話・音声言語研究：関西学院大学手話言語研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 28-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, and Kazumi Maegawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Epistemic modal verbs and negation in Japanese Sign Language	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 East Asian Sign Linguistics	6. 最初と最後の頁 137-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9781501510243-006	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shimotani, Natsuko	4. 巻 1
2. 論文標題 Analyzing head nod expressions by L2 learners of Japanese Sign Language: A comparison with native Japanese Sign Language learners	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 East Asian Sign Linguistics	6. 最初と最後の頁 241-261
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9781501510243-009	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松岡和美	4. 巻 1
2. 論文標題 イントロダクション	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本手話のトピック：基礎から最前線へ』 くるしお出版	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅田裕子	4. 巻 1
2. 論文標題 複合語	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本手話のトピック：基礎から最前線へ』 くろしお出版	6. 最初と最後の頁 81-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下谷奈津子・前川和美	4. 巻 1
2. 論文標題 プロソディ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本手話のトピック：基礎から最前線へ』 くろしお出版	6. 最初と最後の頁 53-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内堀朝子・上田由紀子・今西祐介	4. 巻 1
2. 論文標題 文末指さし	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本手話のトピック：基礎から最前線へ』 くろしお出版	6. 最初と最後の頁 113-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本祐太	4. 巻 1
2. 論文標題 省略	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『日本手話のトピック：基礎から最前線へ』 くろしお出版	6. 最初と最後の頁 145-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakamoto, Yuta	4. 巻 28
2. 論文標題 Apparent VP-ellipsis in Japanese: An argument ellipsis account	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Martin Dale-Hench and Uiko Yano	4. 巻 5
2. 論文標題 Intuitions of native Japanese Sign Language signers on mouthing words with multiple pronunciations	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of Formal and Experimental Advances in Sign Language Theory (FEAST 2023)	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31009/FEAST.i5.03	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Asada	4. 巻 57
2. 論文標題 Weak hand holds of number signs in Japanese Sign Language	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of Chicago Linguistics Society	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 浅田裕子・藤田 元
2. 発表標題 日本手話における二音節単一形態素の強勢
3. 学会等名 第49回日本手話学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 内堀朝子・上田由紀子
2. 発表標題 日本手話(愛媛方言)において述語を形成する主要部に標示される行動RSについて
3. 学会等名 日本言語学会第167回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 内堀朝子・上田由紀子
2. 発表標題 日本手話(愛媛方言)に見られる様態副詞の非手指形態素の波及とRS領域
3. 学会等名 日本言語学会第166回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 内堀朝子
2. 発表標題 日本手話における文末指さしー統語論的分析の試み
3. 学会等名 上智大学言語学講演会(招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Sakamoto, Yuta and Rikuto Yokoyama
2. 発表標題 Silent Presupposition in Japanese Clefts: Ellipsis vs. Proform
3. 学会等名 Poster given at GLOW in Asia XIV(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 松岡和美
2. 発表標題 企画説明：手話言語学の視座と現況：マイノリティ言語を研究すること
3. 学会等名 日本言語学会第166回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsuoka, Kazumi
2. 発表標題 Notes on mouth actions in Japanese Sign Language
3. 学会等名 ティルバーグ大学
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hirayama, Hitomi and Kazumi Matsuoka
2. 発表標題 HOBBY CAMPING READING FILM HOBBY: Noun Doubling in Japanese Sign Language
3. 学会等名 the 14th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR14) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsuoka, Kazumi
2. 発表標題 Grammatical patterns of 'mouthing-based mouth gestures' in Japanese Sign Language
3. 学会等名 The ninth meeting of the Formal and Experimental Advances in Sign Language Theory (FEAST) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Asada, Yuko
2. 発表標題 Weak hand holds of number signs of Japanese Sign Language
3. 学会等名 The 57th Annual Conference of Chicago Linguistic Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yagi, Yusuke, Yuta Tatsumi, Yuta Sakamoto
2. 発表標題 Against syntactic Neg-raising: Evidence from polarity-reversed ellipsis in Japanese.
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics 29. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Martin Dale-Hench and Uiko Yano
2. 発表標題 Intuitions of native Japanese Sign Language signers on mouthing words with multiple pronunciations
3. 学会等名 Formal and Experimental Advances in Sign Language Theory (FEAST 2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 松岡和美 (分担執筆) / 遊佐典昭 小泉政利 野村忠央 増富和浩 (編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 400
3. 書名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題 (3項目、54-57, 274-276ページ)	

1. 著者名 松岡和美（分担執筆）/佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 日本手話で学びたい！（担当章 ろう児の発達における日本手話の重要性，25-39ページ）	

1. 著者名 デボラ・チェン・ピクラー、ポール・ドゥディス、オードリー・クーパー（著）/松岡和美・佐野愛子（共訳）/佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 日本手話で学びたい！（自然手話とろう教育，69-88ページ）	

1. 著者名 Matsuoka, Kazumi, Marie Coppola, Onno Crasborn	4. 発行年 2023年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 349
3. 書名 East Asian Sign Linguistics	

1. 著者名 松岡 和美、内堀 朝子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 手話言語学のトピック：基礎から最前線へ	

1. 著者名 松岡 和美、高野 乃子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 152
3. 書名 わくわく！ 納得！ 手話トーク	

1. 著者名 前川和美・下谷奈津子・平英司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 115
3. 書名 しくみが身につく手話1 入門編	

1. 著者名 前川和美・下谷奈津子・平英司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 118
3. 書名 しくみが身につく手話2 初級編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浅田 裕子 (Asada Yuko) (10735476)	昭和女子大学・グローバルビジネス学部・准教授 (32623)	
研究分担者	下谷 奈津子 (Shimotani Natsuko) (20783731)	関西学院大学・産業研究所・助教 (34504)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坂本 祐太 (Sakamoto yuta) (40802872)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	内堀 朝子 (Uchibori Asako) (70366566)	東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・准教授 (12601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	矢野 羽衣子 (Yano Uiko)		
研究協力者	前川 和美 (Maegawa Kazumi)		
研究協力者	池田 亜希子 (Ikeda Akiko)		
研究協力者	岡 典栄 (Oka Norie)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関